

- 発行者:「科学と社会を考える土曜講座」
 - 連絡:上田昌文(横浜市港北区太尾町810ソフィア大倉山213)
TEL & FAX:045-532-1958 uedaki@terra.dti.ne.jp
 - 振替:00160-4-608503 土曜講座
 - 特別号特価:一部本体200円/送料込みで350円
- ホームページ <http://www.geocities.co.jp/NatureLand/4190/>

遊星より愛をこめて

～幻の「第12話」をもとめて

牧 史郎

●拝啓「科学と社会を“おたく”する土曜講座」様

はじめまして。私はアニメ・特撮研究家の牧史郎といひます(研究者といつてもただの「おたく」です)。21世紀を目前に控えた2000年の今日、いまだに「おたく」というだけで忌み嫌われているこの私が、何故この「どよう便り」という硬派な(?)研究雑誌に拙文を載せる羽目になったのか、自分でも不思議であります。それは幸か不幸か、この「土曜講座」という研究会の代表者である上田氏とふとした事から知り合い、氏の「おたく度」に共感したという事が大きかったと思ひます。

聞けば氏は、科学系の一流大学を卒業され、現在では優秀なフリーランスの研究者だそうですが、それとは別に相当の「音楽おたく」で(特にクラシック系)、そのクラシックに対する異常なマニアぶりは、さすがの私も舌を巻きました。又、これほど膨大な情報を入手して一体何に使おうというのか、と思う程科学系はもとより、内外問わずあらゆる社会問題を含めた「情報収集のおたく」でもありました(でも、その情報網羅力を駆使して、なにやら難しい研究論文を書く事をなりわいとしていらっしゃるので、私などに比べたらずっと生産的な「おたく」なのだと思ひます)。

ともかく、こちらはアニメや特撮の話題、相手は音楽や科学の話題と、全く話が噛み合っていないのに、お互い好きな事をべらべらしゃべり合ったあげく、どこか共感できるものがあつた

というのは、やはりお互いの「おたく」たる所以でしょうね。

そうこうしているうちに、「あの話を書いてみませんか？」との上田氏からの原稿依頼がありました。「どよう便り」のような雑誌には似つかわしくない内容だと思ひ断ろうと思ひましたが、やはり上田氏から紹介された氏の友人の田代氏(彼も私に負けじ劣らじのアニメ・特撮マニアでした)の勧めもありましたし、「おたく」の上田さんが代表をやっているグループですから…。それによくよく「どよう便り」の何号分かを讀ませて頂いた処(正直言つて私の頭では良く判らなかつたですけど)、どの人もとても優秀な論客なんだと思ひのと同時に、要するにこのグループは「科学と社会を“おたく”する土曜講座」だ、と思つたら少し気が楽になつて「あの話」を書いてみることにしました。

私は科学の事などまるで判らないし、社会問題や市民運動といった事にも全く縁の無い人間ですので、一人の「おたくのつぶやき」として、お話をさせて頂くことにします。

●来たぞ我等の「ウルトラマン世代」

今回のお話は、前回の予告でもお知らせしたように、「ウルトラマン」や「怪獣」にまつわる「あるお話」です。

所謂我々アニメ・特撮おたくの話題にこのぼろヒーローやキャラクターは様々で、世代によつてもかなり違ひますが、我々の世代はおたくでなくても「ウルトラマン世代」と呼ばれることがある位(個人的には1958、9年～1965、6年生まれ位の世代だと思ひています)、その手の話をすれば必ずといっていい程ウルトラマンあるいはウルトラ怪獣の名が出てきます。シリーズの全ての怪獣の名前はもちろん、身長、体重、必殺技、放映日、各エピソードの監督、脚本、特技監督名などまで言える人。更につわ者になると、その怪獣のシルエットをみただけで名前が判つたり、目を閉じて怪獣のミニ人形を手で触つて名前を当てると

「ウルトラマン」より

いうマニアまで存在します(先日、「TVチャンピオン」という番組の怪獣マニア・クイズで、そのような「つわ者」達の戦いぶりを拝見いたしました)。「ウルトラ」はそれだけ恐ろしく影響力のあるシリーズと言えるでしょう。

実際「ウルトラマン世代」でそれらの影響を受けたのは、個人のみならず著名人にも多く、アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」の監督・庵野秀明氏(1960年生/氏は「帰ってきたウルトラマン」という8mm映画を作り、自ら素顔でウルトラマンを演じた)やプロレスラーの前田日明氏(1958年生/ウルトラマンを倒したゼットンに復讐するという思いが、格闘技への道を開かせた)、俳優の京本政樹氏(1959年生/ヒーロー研究者としても有名で、美大出の彼はウルトラマンの変身用の小道具の複製を自前で制作したり、最近では初代仮面ライダー(近年“せがた三四郎”で再ブレイクした藤岡弘演じる)のサイクロン号を、8年の歳月と500万円の経費を掛けて完全に復元させた)など数知れません。

最初のウルトラシリーズである「ウルトラQ」(1966年放映)から数えると今年34年目。途中の中断はあっても、30年以上支持され続けているシリーズは、「サザエさん」と「水戸黄門」(いずれも1969年スタート)、そしてこの「ウルトラマン」くらいなものでしょう(「仮面ライダー」(1971年スタート)も、TVシリーズとしては今年20年ぶりに「仮面ライダークウガ」としてリメイクされたので、通算すると来年で30周年ということになります)。最近ではビデオによる旧作の普及や、1980年放映の「ウルトラマン80」以来15年ぶりに復活したTVシリーズ(外国製ウルトラマン「ウルトラマンガレト」(1990年オーストラリア制作)、「ウルトラマンパワード」(1992年アメリカ制作)は除く)、平成ウルトラマン三部作(ウルトラマンティガ、ウルトラマンダイナ、ウルトラマンガイアと続く)の放送、そして世代交代も進み、それらを親子二代で楽しむという時代に入り、世代を越えて支持されるヒーローとなっています。

●我が愛しの「ウルトラ怪獣」

古今東西、ありとあらゆるドラマは、主人公以上に周りの脇役、あるいは悪役が魅力的に描かれている時に厚みを増すと言われますが、「ウルトラ」の人気も同じことが言えます。ウルトラマンやセブン、エース、タロウ、レオ、ゾフィ、80、ティガ、ダイナ、ガイアなどヒーローの魅力以上に「怪獣」の魅力が重要なわけですね。私自身もそうでしたが、子どもにとって未知なる恐怖、力の象徴である「怪獣」の魅力は底知れぬものがあると思います。アメリカでは1930年代の「キングコング」から、1990年代の

「ジェラシック・パーク」まで、怪獣映画はほとんどヒットを飛ばしてきましたが、やはり子どもの集客数が多く、怪獣の人気が高いのは万国共通なのでしょう。

言うまでもなく「ウルトラ」には多数の怪獣が登場します。この「ウルトラ怪獣」の中でも、特に人気のある怪獣、あるいは宇宙人が集中しているのは最初の3作品、つまり「ウルトラQ」(1966.1~7 放映)「ウルトラマン」(1966.7~1967.4放映)「ウルトラセブン」(1967.10 ~1968.9放映)という事が言えます。理由はいろいろ考えられますが、まずこの3作品は、本放送時の視聴率が他のシリーズに比べて極めて高かった事。いずれも平均視聴率30%台、「ウルトラマン」などは40%を越えていた事もありました。そして3作品とも日曜日の午後7時というゴールデンタイムの放送という時間帯も良かったのでしょうし、1966年当時、民放局としては日本最大のネットワーク数を誇る(約30局ネット)TBSによる全国放送というのも大きかったと思います。視聴率1%に占める人口の割合が百万人とされていますが、ゴールデンタイムによる全国同時放送だった「ウルトラ」は、ほとんど日本中の子どもたちの大半が、地域差もなく同じ時間帯で、毎週毎週それこそTVの宗教番組の福音の如く送られて来る怪獣達の洗礼を受けていたと言っても過言ではないでしょう。

次に再放送の回数の多い事。最近ではビデオソフトでほとんどのウルトラ作品が好きな時に観れるようになりましたが、それまではTVの再放送を待つ以外、再度観る方法がなかったわけですね。それでも東京地区に限っては、1年に1回とか2年に1回とかの割合で再放送されていたので、地方も含めると一体どれだけの回数の再放送がなされていたか、調べようもない程です。

あとはヒーローや怪獣、宇宙人のデザインがビジュアル的に個性的で、シャープで洗練されていた事。その後のウルトラ怪獣のデザインの基本となるものが、この3作品で既に確立されてしまったような感すらあります。勿論この初期の3作品の後に続く「帰ってきたウルトラマン」(1971.4~1972.3放映)「ウルトラマンA」(1972.4~1973.3放映)「ウルトラマンタロウ」(1973.4~1974.3放映)「ウルトラマンレオ」(1974.4~1975.3放映)「ウルトラマン80」(1980.4~1981.3放映)、そしてここ数年の「ティガ」(1996.9~1997.8放映)「ダイナ」(1997.9~1998.8)「ガイア」(1998.9~1999.8放映)などに登場する怪獣や宇宙人もそれぞれに魅力あるものも多いのですが、やはり最初の3作品に登場するバルタン星人、レッドキング、カネゴン、ダダ、ピグモン、ゼットン、エレキング、ケムール人、メフィラス星人等(前回の予告用チラシ参照)の圧倒的な個性、インパクトには及ばないよう

な気がします。

そしてこの3作品では(私見では「帰ってきたウルトラマン」までは)、こうした怪獣の魅力を十二分に支えるだけの卓越した脚本、演出、特撮技術の力がフルに発揮されており、トータルで優れた作品に仕上がっている事は言うまでもありません。

●謎の永久欠番「12」

さて、このように根強い人気を誇る初期のウルトラ作品群ですが、実はこの3作品の中で1話だけビデオ、LDにもなっておらず、ここ15年位の間に出版されたウルトラ関連の資料本にも全く登場しない話があるのをご存じでしょうか。これを聞いて「ああ、あれか」とピンとこられる方は、明日から、いやたった今から立派な「ウルトラおたく」の仲間入りです。何故なら、我々の世代のマニアの間では良く知られている話だからです。これは、30年前の「ある事件」がきっかけになって封印され、欠番となってしまう、世に言う(?)「ウルトラセブン第12話」というものです。

近くにレンタルビデオ屋さんがあったら、足を運んでみて下さい。ちょっとしたビデオ屋さんなら「ウルトラセブン」のビデオが置いてあると思います。そして第3巻目を手にとって見てみて下さい。第11話の「魔の山へ飛べ」の次はいきなり第13話の「V3から来た男」になっているはずですが、これは別にセレクト版だからではありません。全集なのに「第12話」がないのです。ではその「事件」とは何だったのでしょうか？それを語る前に、この「ウルトラセブン第12話」とはどのようなお話か、「ウルトラセブン」の作品世界を含めて、簡単にご説明いたします。

「地球は狙われている！今……。宇宙にたまたま幾千の星から恐るべき、侵略の魔の手が伸びようとしているのだ。」第1話のこうした冒頭のナレーションから始まる「ウルトラセブン」は、「ウルトラQ」「ウルトラマン」に次ぐ“空想特撮シリーズ”第3弾として、1967年10月1日よりTBS系全国30局ネットで約1年間放映されました。提供は武田薬品(オープニングが始まる前に、空からの大阪武田薬品本社の俯瞰撮影にのって、タケダ、タケダ、タケダ〜♪のメロディが流れるCMを覚えている方も多いのでは?)。「マン」に続き、カラーで制作されました(「Q」は白黒作品)。

「Q」では、“もし、自然界のバランスが崩れたら？”というコンセプトで、ある種自然破壊への警告も含めながら怪獣を登場させ、「マン」では、凶悪な宇宙怪獣を追ってM78星雲から地球にやって来た宇宙人が、地球の平和を脅かすあらゆるもの(怪獣)から地球を防衛するために地球に残るといふ、宇宙人と怪

獣の格闘を中心に据えており、そして「セブン」では、地球レベルでは科学技術が飛躍的な進歩を遂げ、宇宙レベルでは惑星間の侵略行為が激化してきた時代を1980年代に設定し、宇宙人の侵略に備え組織された「地球防衛軍」及び「ウルトラ警備隊」を助け、異星人の侵略から地球を守ろうとするM78星雲からきた宇宙人・ウルトラセブン(地球名モロボシ・ダン=ウルトラ警備隊員)と侵略宇宙人の戦いを描くという事が基本設定となっていました。

「ウルトラセブン」より

問題の「第12話」ですが、サブタイトルは「遊星より愛をこめて」。脚本は佐々木守、監督は実相寺昭雄、特技監督は大木淳という顔ぶれで、1967年12月17日に放映されました。タイトルは往年のアクション映画「007ロシアより愛をこめて」からとられています。科学の発達した地球では核兵器全廃も達成され、あれだけ行われていた核実験も過去の出来事…。しかし、地球の外ではまだ飽くなき核実験が続けられており、今日も一つの星が放射能の雨に見舞われていた。そのころ東京では、若い女性が突如倒れ意識不明になるという事件が頻発。原因は血液の減少であり、それらの女性は皆同じ時計をつけていた。しかもその時計は、スペリウムという地球外金属でできており、その中には失われた血液の血痕が残されていたのだ。ウルトラ警備隊の隊員アンヌの友人・早苗も同じ型の時計を持っていた。それはボーイ・フレンドの佐竹から貰ったものだといふ。そしてその時計を持ち出した早苗の弟・伸一は、貧血のため学校で倒れてしまった。佐竹が怪しいとにらんだダンとアンヌは佐竹を尾行。佐竹はとある洋館に入る。実は佐竹はスペル星からやって来た宇宙人だった。スペリウム爆弾による自らの核実験

のため、放射能により血液を汚染されたスペル星人は、生きのびるために新鮮な血を求めて地球に侵入していたのだ。洋館は彼らの実験室だった。地球の子どもの血液がより新鮮であると知ったスペル星人たちは「ロケットの絵を描いて宇宙時計をもらおう」という広告を出し、子どもを大量に集めようとした。洋館に群がる子どもたち。間一髪、その企みを阻止しようと洋館に突入したウルトラ警備隊の前に、正体を現したスペル星人が立ちはだかった。応戦するウルトラ警備隊。ダンはウルトラセブンに変身し、激しい死闘の末スペル星人を倒す…。というのが第12話の大まかな粗筋です。

●小さな“おたく”の図書館日記

これを読まれて、「どうしてこの話が？」と思われる方もいるかもしれませんし、「これじゃあ放送禁止になって当然」と思われる方もいるかもしれません。一応申し上げておきますと、この作品は東京地区では本放送(1967.12.17)の後、1969年6月19日(木)の午後6時から6時30分まで、TBS系で一度再放映されており、放映された際、作品自体が問題とされて欠番とされたわけではなく、別の事件が発端となったのです。ではそれは、一体どんな事件だったのでしょうか？

私自身「ウルトラセブン」の第12話が放送されなくなった事に気づいたのは、小学校六年生位の頃でした。当時の私の楽しみといえば、マンガを描いたり、読んだりする事と、TVを観る事、新聞の縮刷版を見る事。何故縮刷版を見ていたかというのと、自分の好きなアニメや特撮ドラマのサブタイトルを調べ、さらにそうした番組が日本のどこで放送されていたかを調べるのが好きだったという、“元祖おたく”のような少年でした。だから学校の帰りなど、まっすぐ図書館の縮刷版コーナーに日の暮れるまで入り浸り、ウルトラマンやエイトマン、サイボーグ009等の本放送当時のTV欄をめくってはメモをとり、東京版が終わると地方版という感じで、調べものに明け暮れていたのです。おかげで、小学校四年生くらいの頃には社会とかの試験は0点とかのくせに、全国の都道府県の名前と位置、県庁所在地及び民放TV局の全ての名前を把握しておりました。それがどうしたと言われそうですが…。

とにかく、ウルトラセブンが全49話あるという事は割と早くからつかんでおりました。そして、小六くらいの頃の再放送だったと思いますが、セブンを見ながらタイトルをチェックしていると、一話足りない事に気づいたのです。よくよく考えてみるとあの「遊星より愛をこめて」のスペル星人の話がないではありませんか(本放送の時は4歳、再放送で観た時は6歳だったのに、な

んでそんなサブタイトルまで正確に把握していたかというのと、縮刷版のチェックもありましたが、子ども心にすごくカッコいいタイトルだと思って記憶していたからだと思います)。そのことを一緒にTVを観ていた兄に言うと、兄は「何か被爆者を馬鹿にしたとかで放送できないんじゃないかな」というように言ったと思います。4つ上の兄は、それこそインターネットなど存在しないあの当時、一体どこから仕入れてくるのか、いつも様々な情報をつかんでおりましたので、意味するところは良く判らなかつたものの、妙に納得したのを覚えています。

その後、この事件は、或る雑誌の怪獣特集でスペル星人を紹介した際「ひばく星人」というキャプションをつけた事で、被爆者の方々の猛烈な抗議を受け、放送を取り止める事にしたのだという話を誰かに聞きました。多分その人もマニア系の人だったと思いますが、詳しい事は知らないとの事でした。しかし、雑誌が問題だったのなら、何も作品まで封印してしまう事はないじゃないか？というのが素朴な疑問でしたが、私は2度観たといってもいずれも6歳までで、本当にその作品自体が被爆者を馬鹿にしたものだったのか、そうではなかったのか、調べる術もなく、ずっと判らずじまいでした。

しかし5年前の1995年、三一書房から「故郷は地球」と題する分厚い本が出版されました。「ウルトラおたく」を自称する人で、この本の題名を見てピンとこない人はもぐりです(理由は後述します)。思った通りこの本は脚本家・佐々木守のシナリオ集でした。もしかして、と思ひ書店で見つけて手にとってみると、ビックリ仰天！何と封印されていた「遊星より愛をこめて」のシナリオが掲載されているではありませんか。その場でむさぼるように私は読みました。何度も何度も。そしてその結果、どう読み込んでみても、この作品は被爆者を馬鹿にしているどころか、ストレートではありませんが、ある意味淡々と核の問題を扱っている事が判りました。前述のあらすじはこのシナリオから要約したものです。更に最近、この事件が1970年10月に起こった事が、あるウルトラ系の本で判りました。そこで向かったのが、国立国会図書館。12歳の時初めて訪れ、年齢制限にひっかかって門前払いを食わされてから20数年目にして、ようやく入館を許されたわけで感慨もひとしおでした。マイクロフィルムを見るのも初めての経験。そこで調べた新聞から、おおよその事件の全容が判りました。

●ある少女の疑問

今から約30年前、1970年10月10日の朝日新聞の朝刊にこんな記事が載っていました。『被爆者の怪獣マンガ～小学館の

「小学二年生」に掲載～「残酷」と中学生が指摘』の見出しで始まる記事でした。以下少し長いですが、そのまま転載いたします。

『「原爆の被爆者を怪獣にみたてるなんて、被爆者がかわいそう」～小学館発行の「小学二年生」十一月号に掲載された一枚の怪獣漫画が、一女子中学生の指摘から問題になっている。問題の漫画は、怪獣特集として折り込みになっている「かいじゅうせっけんカード」のうち一枚。切取って勝ち負けのカード遊びができるようにつくられている。四十五の怪獣が並んでいる中で、人間の格好をした「スペル星人」は、「ひばく星人」との説明書きがあり、全身にケロイド状の模様が描かれている。この怪獣をみて最初に疑問を感じたのは、東京都世田谷区のNさん(42)の長女Yさん(13)。弟が毎月買って読む「小学二年生」をめくっているうち、「ひばくせい人」の「ひばく」ということばが気になった。Nさん一家は原爆の被爆者ではないが、Nさんが東京都原爆被害者団体協議会の専門委員をしている関係から、日ごろ家庭内で原爆問題を話合うことが多かった。Yさんは「実際に被爆した人たちがからだにケロイドを持っているからといって、怪獣扱いされたのではたまらない」と思った。その晩、父親のNさんにその漫画をみせ、疑問を話した。Nさんはその場で「小学二年生」の編集長にあてて手紙を書いた。「現実生存している被爆者をどう考えているのか。子どもたちの疑問にどう答えるのか」と。同社からの返事はまだこない。このため都原爆被害者団体協議会、原爆文献を読む会などは同社に対し、正式に抗議文を手渡すことを近く検討する。「小学二年生」編集部は説明だと、この怪獣漫画は、映画の特殊撮影で知られる世田谷区砧七丁目、円谷プロダクションで制作した、という。円谷プロの話では、「ひばくせい人」は架空の宇宙人として設定したといい、四十二年十二月十七日にTBSで一日だけ放送したが、別に問題にならなかったという。しかし「格好も人間そっくり、そのうえケロイドまで描いた点はたしかにまずかった。被爆者の方たちに不快な気持ちを抱かせたことは反省する」と円谷プロ営業部長はいつている。(以下略)』(1970年10月10日／朝日・朝刊)

この記事が、「第12話」事件を最初に報じたものと思われます。要するにスペル星人を載せたのは、教育雑誌「小学二年生」で、しかも付録に付いていた「かいじゅうせっけんカード」の中一枚として。そしてそのカードに「ひばくせい人」というキャプションがつけられており、それを都被爆協の委員をやっていたらっしやった方の中学一年生になるお嬢さんが見つけた、「被爆者を怪獣扱いしている」と憤ったのが発端という事になります。この事件は、この後朝日に続き、毎日、読売、産経、西日本新

聞、東京タイムズの6紙が報じていますので、その後の経過を各誌の記事から抜粋する形で見てみましょう。

「ひばく星人」スペル星人

●「被爆怪獣」攻撃命令

『秋田書店でも被爆怪獣～広島被爆協と原水禁が抗議～原爆の被爆者を怪獣にみたて問題になっている小学館発行の「小学二年生」十一月号の怪獣漫画と同じものが、秋田書店発行の「怪獣ウルトラ図鑑」にも掲載されていることが十二日わかった。このため広島被爆協、原水禁日本国民会議は同日「いまなお苦しんでいる多数の被爆者を傷つけるものだ」と両方の発行元などに強く抗議することをきめた。ウルトラ図鑑に掲載されているのは、放射能におかされた「スペル星人」を「被爆星人」とし、全身にケロイドの傷が描かれた絵に「地球人と同じ格好に化け、目から発するスペル光線で一万人が死ぬ。新鮮な地球の子どもの血をとる」などの説明がついている。(中略)この図鑑はほかに百余の怪獣を紹介、中学生向きに二年前の初版以来すでに十五版を重ねている。(以下略)』(1970.10.13／朝日・朝刊)

『被爆者を怪獣扱い～原水禁会議が抗議～。(一部略)広島県被爆教師の会も「教育雑誌がこんなものをのせるとは、人道上も問題だ」と近日中に出版社へ質問状をだす。問題の怪獣マンガは、折り込み特集ページ「かいじゅうせっけんカード」にある四十種の怪獣の一つ「スペル星人」。人間の姿をし、頭、手、腹、足に大きなケロイドがあり「ひばくせい人(おもさ・百・一まんとうん)、目からあやしい光を出す」と説明がついている。一広島県被爆教師の会会長の話「教育雑誌がなぜこん

な興味本位のまんがをのせたのか。編集者、作者の原爆についての認識が問題だ。へたをすると、小さな子どもたちに被爆者に特殊な遺伝があるように想定させ、被爆者への差別感情をつくるなど教育上の危険がある」—小学館学年誌編集部次長の話「ひばくせい人ということばは小学館がつくったものではなく、これまで円谷プロが制作した“怪獣シリーズ”の一つとして一般にも知られているので使った。このシリーズには宇宙星人がたくさん登場しており、形も人間より大きいので人間をもじったものではない。また、ストーリーも地球の平和と原水爆の恐ろしさを訴えているもので、被爆者をぼうとくするとは思ってもしなかった。しかし全体のストーリーを説明しないで一部を取り上げ、誤解を招いたことはこちらの手落ちなので、反省している。』(1970.10.13/産経、東京タイムス、西日本)

『小学館が謝罪～ケロイドの怪人マンガ～日本原水協の被爆者対策担当常任理事S氏とI氏は、十四日午前、東京千代田区一ツ橋の小学館を訪れ、同社発行の「小学二年生」十一月に掲載した怪獣特集で、全身ケロイドでおおわれた“怪人”を「ひばくせい人」として紹介した問題について厳重に抗議した。席上、S氏は「全国にいる被爆者はいまなお原爆の悪夢に苦しんでいる。それを純粋な子供の雑誌に、怪獣としてあつかっていることはあまりに非常識」と申し入れた。これに対し小学館のH第一編集部長は「被爆の恐ろしさを怪人を通して教えようとしたにしても軽率だった」と答え、日本原水協の申入れを全面的に受入れ謝罪した。』(1970.10.15/毎日・朝刊)

『「被爆星人」で円谷プロ謝罪～原爆の被害者を怪獣にみだて問題になっている小学館発行の「小学二年生」十一月号と秋田書店発行の「怪獣ウルトラ図鑑」の怪獣漫画「被爆星人」について広島被団協は両方の発行元や制作をした円谷プロに謝罪や制作の中止を求める抗議文を先月十八日出していたが、このほど円谷プロ、円谷一代表取締役名で同協議会へ謝罪文が寄せられた。それによると、被爆者に不快な思いをさせたことを十分反省し、今後一切、「スペル星人」に関する資料の提供を差控える、としている。』(1970.11.3 /朝日・朝刊)

『朝日ソノラマなどにも抗議～被爆者を怪獣扱い～さる十月、児童学習雑誌が原爆被害者を怪獣扱いにしたが、その後、同様の“被爆星人”を児童用絵本に載せていることがわかり、長崎原爆被災者協議会は抗議運動を始めることになった。問題の絵本は黒崎出版がさる七月に発行した「ウルトラ怪獣写真絵本」と朝日ソノラマ社が先月十五日で発行した「ウルトラ大怪獣」。』(1970.12.10/読売・朝刊)

以上、主な関連記事を抜粋してみました。70年の10月に始まったこの「被爆怪獣」事件は「小学二年生」(小学館)以外

にも「怪獣ウルトラ図鑑」(秋田書店)その他の本にも「被爆星人」と命名されたスペル星人が掲載され、物議を醸し、各被爆者団体から抗議を受けた3社(小学館、秋田書店、円谷プロ)その他が年内中に謝罪をし、秋田書店は「怪獣ウルトラ図鑑」の絶版、円谷プロはスペル星人関連資料及び作品の再放送の凍結、小学館は翌1971年二月号の「小学二年生」に改めて謝罪広告を出し、それまで毎月のように掲載していたウルトラ怪獣関連の特集を自粛し、更に翌三月号から「ヒロシマ」関連の小説を沢山書いてきた、児童文学者の今西祐行氏による絵小説「ゆみことつばめのおはか」の連載をスタートさせる、という形をもってこの事件は一応決着したようです。

私にとっても、今まで良く判らなかつた真相(?)が明らかになり、ようやく霧がはれたような気分にと、言いたいところですが、未だ釈然としない、幾つかの疑問も残りました。それについて述べてみたいのですが、以下の部分は、私の個人的な想像、独断と偏見に基づいた感想ですので、予めお断りしておきます。

●幻の「怪獣カード」

私が最も疑問に感じていた事は、単純に何故「ウルトラセブン第12話」が欠番となり放送できなくなったのか、という事でしたので、雑誌の掲載についての問題は聞いてはありましたが、特に重要視はしていませんでした。しかし、一連の流れをみるとその事も考えざるをえませんので、その辺で疑問に思った事を述べてみますと、まず、この事件の発端になった中学一年生のYさんが、弟さん(この方は恐らく私と同じ歳で、この年度の「小学二年生」を私も読んでいました)の持っていた「小学二年生」十一月号の「かいじゅうせつけんカード」の中に、「ひばく星人」のキャプションのついた「スペル星人」の「怪獣漫画」を見て憤ったという件。私はこの記事を読んだ時に「怪獣漫画」とありましたので、てっきりスペル星人をうんと誇張して描いたストーリーマンガが載っていて、それこそ「被爆者」を嘲るような内容があったのかと思ったわけです。そこで、当時の「小学二年生」1970年十一月号の現物を、同じ国会図書館で調べたところ、何とその怪獣カードのページ(3ページ分)がそっくり抜き取られてしまっているではありませんか。一体誰の仕業なのでしょう？やはり物議を醸した問題のページは一般の閲覧にふさわしくないと判断し、図書館自らこの部分を破棄してしまったのでしょうか？あるいは出版社に抗議された方々の関係者でしょうか？あるいは単なる私的な欲望に走ったマニアの仕業でしょうか？真相は「藪の中」です。仲間のおたく関係者にあたりまし

たが、さすがに「小学二年生」のバックナンバーまでコレクションしている者はおらず、結局問題の「怪獣漫画」の現物を確かめる事はできませんでした。

しかし、それは意外と近くにありました。先述した6紙の記事をチェックしていたら、例の「怪獣漫画」の写真が、産経、西日本新聞、東京タイムズの3紙に出ていたのです。ところが…それは所謂「マンガ」ではなく、私も何度も見た記憶のある、当時よく出回っていたタイプのスペル星人の写真でした。マイクロフィルムですので不鮮明ではありますが、おそらく写真を使ったカードを作り、その裏に「ひばくせい人」というキャプションをつけていたのでしょう。でも、今の時代ならどんなジャーナリストでも、唯の怪獣の写真のついたカードを「怪獣漫画」と表現する人は誰もいないと思います。「漫画」というのであれば、少なくとも「絵」で描かれていなければ「漫画」とは言えないわけですから。つまり、当時は雑誌の漫画もTVのアニメや特撮も、内容も見ずに「子どもの物」として馬鹿にされ、低俗・俗悪の代名詞である「マンガ」という言葉でひとくくりにされていたわけです。本来、意味的に間違いがあるにもかかわらず、「怪獣(宇宙人)の写真」というだけでれっきとした「写真」を、「漫画」という誤った表現で「どうせ子どもの物だから」と何の躊躇もなく表現して憚らないような無知なマスコミが幅をきかせていた(今も余り変わりませんが)のです。特にこの頃は「活字」偏重の子ども文化受難の時代であった事がわかります。

では絵もストーリーも何もない、「マンガ」でもないのなら尚のこと、何故Yさんは写真とキャプションだけを見て「被爆者を怪獣扱いした」と思ったのでしょうか？私自身スペル星人の姿は、ストーリーはともかく鮮明に記憶していましたので、「被爆怪獣」の事を初めて知った時(中学位の頃)も、スペル星人と「被爆」という事が全く結びつきませんでした。

●「被爆怪獣」第1号

個人的には、「被爆怪獣」と聞いてすぐ頭に浮かんだのは「ゴジラ」でした。言うまでもなく水爆実験によって太古の眠りをさまされた怪獣で、私は小学校五年生の時にTVで初めての「ゴジラ」(1954年公開/監督・本多猪四郎、特技監督・円谷英二)を観ましたが、「ひろしま」とか「ひばくしゃ」といった言葉はなんとなく聞いていた私には、水爆によって「被爆した」怪獣ゴジラが東京を暴れまわる姿は、「怪獣」を越えた「被爆した」生き物の怨念みたいなものが感じられ、それまで聞いていた広島や長崎の被爆者のイメージと妙にダブった記憶があります。

制作当時(1954年)に起こった「第五福竜丸事件」が大きな

影響を与えたとされる「ゴジラ」の、本多猪四郎氏、円谷英二氏を初めとする制作スタッフ達の「反核」への“想い”にあてられたのかもしれませんが、私はその時、TVの前で明らかに「被爆者」を「ゴジラ」という「怪獣」とみなしていた筈です。そして「ゴジラ」は“被爆者の象徴”であるという想いは作り手の中にも確実にあったのだと思います。そうした「元祖・被爆怪獣」であるゴジラは公開当時、あるいはその後「被爆者を怪獣扱いした」という非難を受けたのでしょうか。私の知る限りそういう事はなかったと記憶しております。では、ゴジラの場合とスペル星人の場合の違いは何だったのでしょうか？その点から、Yさん及び被爆者の方々の気持ちを考えてみましょう。

一つには「言葉」の違いがあります。ゴジラは公開当時の宣伝文句で「水爆大怪獣」という風に謳われていました。「水爆」と「被爆」というキャプション(言葉)を比べると、それらから受けるイメージはかなりの隔たりがありましょう。実際「被爆」された方々にとって、「被爆」という言葉を聞いた時にイメージするのは様々だと思います。そしてそのほとんどが、差別、偏見、傷、ガンなどといったネガティブな物であるに違いなく、少なくともポジティブなイメージが持てない事は間違いないでしょう。それだけ当事者の方々にとっては、「被爆」という言葉は強烈な意味を持っているし、その言葉の違いは歴然としていると思われれます。

又、ヴィジュアル的な違いも大きいでしょう。ゴジラは明らかに人間とは全く違う「怪獣」の姿です。スペル星人の方は宇宙人ですので、ゴジラに比べたらずっと人間に近い姿をしています。ヴィジュアル(絵や写真)というのは、特に人間ではない異形のものが写っていたり、描かれていたりしても、大抵の場合それだけで意味を持つものではありません。それが何かを示す記号(言葉)があって初めて、意味を持つ場合がほとんどです。

今回の場合も、写真とキャプション(言葉)の組み合わせによって起こった事件と言えるでしょう。勿論その組み合わせにどのような意味を感じるか、という事は個人によって違いますが…。例えばもしこの「スペル星人」のキャプションが、「ひばく星人」でなく「すいばく星人」となっていたら、全く印象は変わっていたかもしれません。逆に「ゴジラ」のキャプションが「水爆大怪獣」ではなく「被爆大怪獣」となっていたら、物議を醸す事になっていたのかも。それは今となっては想像でしかないのですが…。

●総天然色怪獣写真

ヴィジュアルという事について、もう一つ大切な事を考えておかなければなりません。これも一連の記事の中で感じた事なのですが、スペル星人のデザインについてです。既にお気づきの方もいらっしゃると思いますが、前号の予告用チラシに何体か載せておいた怪獣・宇宙人の中にスペル星人が入っているのです。何故チラシをこのようなデザインにしたのかというと、ただの“おたく”の酔狂と思ってもらっても構わないのですが、前述した問題の「怪獣カード」の形をなるべく再現しようと思ったのです。現物こそ発見できませんでしたが、新聞でカードの写真を見た時に、だいたいどのようになっていたのかは見当がつかしました。新聞に「45枚のカードからなる」というような事が書かれてあったので、何者かによって抜き取られた3ページ分には、1ページ15枚×3ページ分のカード、つまり横3枚縦5枚のカードからなるページになっていたのだらうと思われまます。チラシには12体しか載せられませんが、切り離しも可能なように作ったわけです。そしてその中に「ひばく星人」のキャプションをつけたスペル星人をさりげなく入れ込み(写真は現物と同じタイプのもので、何か感じられる方がいらっしゃるかどうか試したかったわけです。

しかしながら、前回のチラシと現物の「怪獣カード」とは、決定的に違うところがあるのです。それは紙の厚さでも色でもありません。実は現物のカードはカラー印刷されており、スペル星人の特徴である体中にあるケロイドを思わせる模様がクリアに写っているという点です。

恐らくYさんが「被爆者を怪獣扱いしている」と思った一番の根拠は、この事ではないかと思われまます。このカラーで写された、人間ではないが明らかにケロイドを思わせるような模様のある生き物に、「ひばく星人」とつけられたキャプション。チラシは白黒でよく判らないかもしれませんが、最近私が入手した、同じタイプのスペル星人のカラー写真を見ると、確かにそう思う人もいるかもしれない、と言えなくもない代物です。記事の抜粋にもありましたが、「怪獣カード」に使われたものと同じ写真が「怪獣ウルトラ図鑑」にも掲載されていて問題とされましたが、これなどは事件の2年以上も前に発行され、15刷を重ねるロングセラーの本でした。かくいう私も一時この本をバイブルとしていた時期があったので、記事を読んだ時は驚いたものです。とにかく「被爆星人」のキャプションを載せたまま2年以上もロングセラーになっており、その間何の問題もなかったわけです。それは、被爆者団体の方々がこの事件が起きて初めてこの本の存在を知り、抗議した事からも明らかです。

ではどうして問題にならなったのでしょうか？考えられる事は二つです。この本を手にしていただいた子どもたちの多くは「ウルトラセブン第12話」を観ており、「被爆星人」という意識をほとんど持たずに(「被爆星人」という言葉は、劇中に一切出てきていませんので)この本を愛読していた事(私もその一人です)。もう一つはさつきと同じ理由ですが、この本に使用されている写真はやはり白黒で、ヴィジュアル的にもケロイドという雰囲気は薄く、「被爆者＝宇宙人」という風に結びつきにくかったという事が考えられます(もちろんカラーであったとしても、そのように受け取られたかどうかは判りませんが)。

●パーソナルなもの

しかしながら、ヴィジュアル的な事やキャプション(言葉)など、こうした要因はあるにしても、やはり物事を左右するのは、最終的には個人の価値観という事になるでしょう。ある物事を白とみるか黒とみるか、正義か悪か、これらは時代や個人個人の生活環境によって大きく変わります。このYさんのお父さんは都被団協の委員であられたという事ですので、Yさん自身の核に対する意識も、とても高いものをお持ちであるに違いありません。だからYさんが今回の事を問題にしたのも当然の事と言えます。逆に言えば、Yさんがこの「怪獣カード」をもし見ていなかったら、この事件は起こらなかったかもしれません。

それに、新聞記事にも再三にわたって「教育雑誌にこのような…」という表現が出てきている事でも判るように、このカードが教育雑誌として広く認知された「小学二年生」に載った、という事も問題を大きくさせた原因の一つでしょう。逆にいうと、マスコミや当時の大人達の多くが軽視していた「少年マガジン」や「少年サンデー」といった純粋な漫画雑誌(漫画という媒体をどうみるかという事も、個人の価値観によりますが)に最初から載っていたら「低俗な漫画雑誌ならやりそうな事」と、全くかどうかは判りませんが、少なくともこれ程の騒ぎにはならなかった可能性もあります。良くも悪くも、物事の本質よりも「見た目」や「入れ物」によって物事の善し悪しが判断される場合も多いですから。勿論、これらの事とは関係なく、またYさん以外の人が「カード」を見つけて、問題にしていたかもしれません。

いずれにしろこの出版物に関する事柄は、個人の価値観による見解の相違があるにしても、また仮にそれが出版社の全くの過失であり(私は出版社の“過失”であったと思いますが)悪気は無かったにしても、結果的に心が傷つき、不快な思いをされた被爆者の方は大勢いらっしゃるでしょうから、最終的に出版社による謝罪及び、写真の掲載・重版の差し止め等の処

置は致し方のない事だったでしょう。

●「ひばく星人」の名付親

さて、事の起こりが雑誌媒体ただだけに、印刷物に関する最終的な措置はやむをえなかったにしても、今度は実際の映像作品を封印してしまった事をどう見たらよいのでしょうか？記事によると、各被爆者団体が秋田書店、小学館、そして円谷プロの3社に対し抗議を行い、謝罪、自粛という事になったわけですが、出版社の責任は判るとして、「円谷プロ」の側には一体どのような責任が考えられるのでしょうか？

敢えて考えてみますと、とりあえず作品自体の評価はおくとして、雑誌媒体に怪獣写真を提供し「ひばく星人」というキャプションがついていた事実を、知ってか知らずか黙認していた（問題意識を持って差し止めていなかった）、あるいは気づかなかった、という点は問題にされるかもしれません。なぜなら「怪獣ウルトラ図鑑」はもとより、雑誌媒体等に使用されている怪獣の写真には必ず©(著作権者)の所に「円谷プロ」と明記されているはずで、そうである以上、何らかの不都合・トラブルがあった場合、利益を受ける場合も損なわれる場合も、著作権者としての責任を問われるのは仕方ない事だからです。

しかしながらこのケースの場合は、黙認とかいう以前に放送時に何の問題もなかったわけですから、ごく自然に、そこに出てくるキャラクターにしかるべきキャプションをつけて(勿論作品のテーマにあった)雑誌に載せる事は普通に考えられる行為です。でも、復刻されたシナリオのどこに目を通して「被爆」などという言葉は一言も出てきませんから、このキャプションを円谷プロ自身がつけたものなのか、最も早くこのキャプションを使って本を出した秋田書店がつけたものなのか、今となっては判りません。もしこれが、秋田書店がつけていたものならば、「黙認(?)」していたという円谷プロの責任は皆無とは言えないまでも、少なくとも大幅に軽減される事は間違いないでしょう。円谷プロの方も、まさかこんな大騒ぎになるとは！という感覚だったと思います。とにかく雑誌の件についての謝罪、写真等の引き上げという処置は、各出版社同様、円谷プロに対しても妥当性があると考えてよいでしょう。

●円谷プロ的本土決戦

では、問題の「映像作品の封印」という事についてはどうなのでしょう。各団体からの抗議の中に、今後の放送を差し止めろという要求があったのでしょうか？それを受けて一方的に自

粛をしてしまったのでしょうか？まがりなりにも円谷プロは、TV作品が中心とはいえ、れっきとした映画を作っている独立プロです。抗議されただけで、自信を持って送り出した筈の作品を簡単に自粛してしまうとは考え難いものです。

それに、この事件の成り行きを新聞等でみる限りにおいて、マスコミを含め各団体の関係者が、映像作品の方もきちんと検証した上で抗議したとは考えられません。それならそれで「作品をみて判断して下さい」という選択肢もありえたはずですが。

実は東京地区に関しては、この騒動が起こっているまさにこの頃、作品をみて判断してもらうチャンスがあったのです。各出版社が謝罪を始めていた頃の1970.10.28日から、TBS系にて「ウルトラセブン」の再放送がスタートしていたのです。TVの再放送というのは通常、その作品の本放送終了後3年間位は、局がその作品の放送権を保有する事ができ、その間は局が自由に再放送のプログラムを組めますので、この時の再放送は、この事件が起きる前からすでに予定されていた事でしょう。だから全くの偶然であったと言えます。問題のスペル星人の回は第十二話ですから、そのまま順番通りに放送していけば、翌月の11.12日に放送となった筈です。

新聞記事によると11.3日の記事の段階で、当時の円谷プロの社長であった円谷一氏(特技監督・円谷英二氏の長男。TB S演出部から本家・円谷プロの監督へ。初期ウルトラ・シリーズで数々の優れた作品を演出。「東京一」の名前で、幾つもの「ウルトラ」の主題歌の作詩も手掛ける。1970年1月、円谷英二氏死去に伴い、円谷プロ二代目社長に就任)が各被爆者団体に回答文を送り、謝罪と今後スペル星人に関する一切の資料・作品を外に出さない旨を公言されていたようです。氏も社長である以上に映像作家であるわけですから、安易に作品の自粛を行ったとは思えません。「とにかくこの機会に作品をみてもらって」という事も当然考えたでしょう。その辺の氏の心の内は後で検証するとして、とにかくこの数週間の中の円谷氏は、目前に迫った「第12話」の再放送をどうするか、相当悩まれた事は想像できます。まさにポツダム宣言を受諾するかどうかの瀬戸際に立った鈴木貫太郎の心境だったのではないのでしょうか。オーバーではありません。クリエイターというのはそういうものだと思います。とにかくこの時の「第12話」の再放送は見送られ、以後のスペル星人の封印は決定してしまったのです。

しかし、封印の理由は本当に何だったのでしょうか？私なりに検証もしてみたこと述べさせて頂きたいと思いますが、その前に、ここで少々TVの映像作品の自粛・放送禁止という事について考えてみたいと思います。

●“お蔵入り作品”の秘密

TV番組というものの、特にドラマ(アニメ・特撮物を含む)というものが放送禁止になる理由としては、所謂「放送コード」からみて「言葉の表現」が不適切である場合か、「ヴィジュアルとしての表現」が不適切である場合か、大半がこのいずれかであると思われます。元々映像というものは、視覚と聴覚しか伴わないわけですから当たり前といえば当たり前なのですが、ではこの「不適切な表現」とは一体どのようなものなのでしょう？そもそもTVというものがマス・メディアである以上、そういった「不適切」に当たるかどうかという基準が、時代とともに、あるいはその場の状況で変わる事は当然と言えますが、実は他のアニメや特撮物にも、スペル星人同様放送できないもの、或いはシーンを削除して流されているものが多数あるのです。参考までに例をいくつか挙げてみたいと思います。

●禁じられた言葉

「佐武と市捕物控」(1968年制作／石森章太郎・原作)江戸の下町を背景に下っ匹の若者・佐武と、居合の達人である盲の市のコンビが活躍する捕物帳。白黒作品という事もありますが、市というキャラクターが盲人であるという事で、毎回「めくら」「どめくら」という台詞の連発で、差別用語多しという理由で再放送されず。もっとも最近LDやビデオで全巻発売されていますが、ビデオ版は近年公共性が上がっているためか、不適切な台詞は全て音が消されています。

「佐武と市捕物控」より

「どろろ」(1969年制作／手塚治虫・原作)これは比較的有名な手塚作品のアニメ化。時は戦国時代。地侍・醍醐景光は天下をとるという野望を叶えたいがため、生まれてくるわが子を生贄として48体の魔物に捧げる。身体中の48箇所を魔物に奪われ

た赤子はもはや人間とは言えない状態で捨てられるが、寿光という医師に助けられ、作り物の体を与えられ、百鬼丸として成長。奪われた体を取り返すべく、48体の魔物と戦っていく。これだけでも十分おわかりのように、主人公が目も鼻も口も手足も作りものという所謂「かたわ」として登場するわけですから、これは「佐武と市」の比ではありません。毎回毎回「かたわ」「めくら」「つんぼ」「おし」といった放送禁止用語の連続で、全26回全ての「不適切」な言葉を消していったら、それこそ48箇所ではどうい済まないといういわくつきの作品です。これも白黒作品で、LDのみで全巻復刻されています。

「どろろ」より

「タイガーマスク・第19話～試合開始2時間前～」(1970年制作／梶原一騎・原作)これはかなり有名な本格プロレスアニメ。悪役レスラー専門の養成組織「虎の穴」の優等生・伊達直人ことタイガーマスクは、自分が育った孤児院「ちびっこハウス」の子どもたちや、全国の恵まれない孤児達を救うため、組織と手を切り、裏切り者として「虎の穴」の殺し屋レスラーと戦い続ける。この作品は「みなしご」(この言葉も死語となりました)と主人公との交流が一つのテーマになっていましたので、毎回それら孤児達の背景にある社会—交通戦争、四日市喘息、過疎の村、登校拒否、被爆等—に鋭く切り込んでゆく、単なるスポ根ではなく、社会派のヒューマン・ドラマとしても一級の作品でした。その中の第19話。これはタイガーがある試合の巡業先で知り合った、父親をなくし病気の母を助けて廃品回収業を手伝っている少年の物語。本作(第19話)は、東京地区では1973年の再放送までは放送されており、1980年に7年ぶりに再放送された時には外されておりました。その時TV局(日本テレビ)に問い合わせた処、その少年の仕事(廃品回収業)と彼が住んでいる長屋の描写が、どうも「部落」を思わせるという事でこのエピソードだけ放送できないという事でした。しかしLD全集ではきちんと第19話は収録されていたので、チェックも可能です。

以上は全てアニメ作品ですが、特撮作品も数本挙げておきます。

「怪奇大作戦・第24話～狂鬼人間～」(1969年制作／円谷プロ)科学を悪に利用しようとする犯罪者に立ち向かうSRI(科学捜査研究所)のメンバー達の活躍を描く。「ウルトラセブン」の後番組として、日曜夜7時のタケダ・アワーから放映され「ゲゲゲの鬼太郎」「河童の三平・妖怪大作戦」「妖怪人間ベム」「バンパイヤ」などといった怪奇色の強いアニメ・特撮作品がオン・エアされていた1968～1969年当時の怪奇ブームの中で、科学犯罪の裏に潜む抑圧された人間の悲しい怨念、業などを描いた極めて社会性の強い作品でした。さてこの第24話「狂鬼人間」。精神病院を脱走した心神喪失者によって夫と子どもを殺害されたある女性科学者が、刑法39条(精神鑑定)により犯人を無罪にしたこの社会に復讐するため、自ら発明した「脳波変調機」(一時的に人間の脳波を狂わせる装置)を使って人を狂わせ、犯罪を犯させていく“狂わせ屋”の物語。最近の少年犯罪には必ずといっていい程問題となる「精神鑑定」や刑法39条の矛盾を先取りするような内容でしたが、東京地区では1992年にBSで1973年以来20年ぶりの再放送がなされ、脳波を狂わせられた人間の、殺人シーンを含めた描写が「不適切」としてオクラ入りに。その後発売されたビデオやLDからも第24話は削除されていました。

●特撮ドラマと少年

「超人バロム1」(1972年制作／さいとうたかお・原作)全宇宙の悪の化身・ドルゲを追って地球にやってきた宇宙の正義の象徴・コプーは、木戸猛、白鳥健太郎の二人の少年にバロム1の力を与えた。コプーのエージェント・バロム1となった猛と健太郎の二人は、地球の平和を脅かすドルゲに敢然と立ち向かってゆく…。「ゴルゴ13」で知られるさいとうたかお原作の数少ない変身ヒーロー物。これは実は再放送不可能な作品ではないのですが、ある物議を醸した事件がありました。それは当時、巷では「ドルゲ事件」(ゾルゲ事件ではありません)と言われ(?)概要を説明すると、兵庫県に在日ドイツ人で「ドルゲ」という姓を持つ「少年」がいて、「バロム1」のヒットでドルゲの悪役ぶりが認知されていたためでしょう、ドルゲ君は、学校で友達から「や〜い、ドルゲ」といじめられたわけのです。そこで怒ったドルゲ君の父親が、番組の差し止めを裁判所に訴えたという事件なのです。その父親によれば、ドイツ人は「姓」という

「タイガーマスク」より

「超電磁マシン・ボルテスV」(1977年制作／八手三郎・原作)角のあるものがないものを支配するボアザン星の人種差別を逃れ、地球人となったボアザン星人こと剛健太郎は、いずれ行われるであろうボアザン星の地球侵略に備え、巨大ロボ・ボルテスVを完成。地球人との混血である5人のわが子をパイロットとして育てあげる。そしてボアザンの攻撃から地球を守るボルテスVが起動する。ロボット・アニメ全盛の頃に作られた根強いファンを持つ作品ですが、角のあるボアザン星人がそれを持たない同胞を奴隷にしているという描写や、劇中の「剣奴」という言葉がやはり「奴隷」を思わせるという理由で今は放送できないそうです。ビデオはセレクトされたものが3本発売されていますが、全部見たいという方は是非フィリピンへ。ご存じの方もいるかもしれませんが、この作品はフィリピンではすごい人気で、視聴率80%とも90%とも言われており、国民の大半がフィリピン・バージョンに加えて日本語バージョンの主題歌まで歌えてしまうという、もの凄いフィーバーぶりなのです。恐らく権力に対抗していくというテーマが受けたのか、15年程前反マルコス運動のテーマ・ソングにも主題歌が使われ、これを恐れたマルコス大統領が元首自ら「ボルテスV」の放送を禁止した、というエピソードまである程です。近年、放送禁止は解除となり、以前と変わらぬ絶大な人気を誇っているという事です。

「ボルテスV」より

ものに誇りを持ち、それを汚される事を極度に嫌い、場合によっては決闘にも及ぶという事らしく(ドイツ人全員がそうなのか、「ドルゲ氏」だけがそうなのか判りませんが)、名誉を傷つけられたと大変な騒ぎだったそうです。結局シリーズの途中から番組の最後に「ドルゲという悪者はフィクションの中のものであって、実際は存在しないものです」というテロップを流すという事で騒ぎは納まったそうですが、その事件が影響したのか、その後の視聴率ははかばかしくなく、結局一年放送の予定が八ヶ月で終了することになりました。もし「セブン・第12話」も本放送時にクレームをつけられていたら、「セブン」は打ち切りとなり、その後のウルトラ・シリーズも存在せず、今日のような息の長いシリーズにはならなかったかもしれない、と思わせるような事件でした。LDで全巻、ビデオでセレクトされたものが発売されています。

「エコエコアザラク」(1997年制作/古賀新一・原作)黒魔術を操る黒井ミサが人間の世界で遭遇する様々な事件。本格オカルト・ホラー物として制作され、人間のエゴや欲望、怨念といったテーマも盛り込まれ、人間ドラマとしても見応えがあり、土曜の深夜2時台の放送というマニア向けの作品。これも「バロム1」同様「少年」がらみの事件が問題となりました。1997年に世間を騒然とさせた「酒鬼薔薇」事件がそれで、リアルなスプラッター(血しぶき)描写も多い本作は放送中止に。未放送分を含めたビデオが全巻発売されています。なお国産ではありませんが、現在でも米国で放送中の人気シリーズ「Xファイル」(1993～)も同時期に日本でも放送されていましたが、その過激な描写のため、やはり「エコエコ」と全く同じ理由で放送中止となってしまいました。

かなり趣味に走って長々と紹介させて頂きましたが、以上のようにほとんどの作品が「ヴィジュアル」か「言葉」の問題でオクラ入りになってしまっています。話を戻して、「第12話」の場合を考えてみましょう。もしかしたら円谷一氏は、上のいずれかの問題が作品にあると判断して封印したのかもしれないからです。

●迷走!?実相寺マジック!

まず「言葉の表現」に関してみると、既に述べたようにシナリオを読む限りにおいて、所謂「放送コード」に引っ掛かるような言葉、差別語等を使っているとは思えないし、勿論「被爆星人」などという言葉は一言も出てきません。だから「言葉」の問題はなかったと思われます。

では「ヴィジュアル面での表現」はどうなのかというと、これに関しては何とも言えないというしかありません。映像の細かい

ディテール全てを覚えているわけではありませんし、実際に仕上がった映像は、細かい部分でシナリオ段階にあったシーン等が、変わっている場合もなかったとは言いきれません。だからヴィジュアルにおける「不適切な表現」があったのかなかったのか、確かな処は今一度作品を観てみない限り確かめようがないという事です。

ただし「第12話」の監督である実相寺昭雄氏の持つ独特の映像表現が「誤解」を招く原因になった可能性はあるかもしれません。知っている方は十分御承知の通り、実相寺氏はTBSの演出家から初期ウルトラ・シリーズの監督となり、芸術性の強いATG映画の監督をやり、CMの演出や文筆、そしてその屈指の音楽的造詣の深さから東京芸大の教授にまでなり、最近ではオペラの演出も多数手掛けるという多彩・鬼才ぶりを発揮しています。氏の映像というのは、広角レンズの多用による極端なまでに人物や背景を歪めた撮影、逆光によるシルエット撮影、ほとんど人物の輪郭位しか判別できない程のアンダーな照明、超クローズ・アップ撮影など、その凄まじい絵作りは、どんな絵を撮っても異質な世界を紡ぎ出してしまうという強烈なもの。特にその超クローズ・アップ撮影などは、氏がTBSの演出家の頃担当した「美空ひばりショー」の中継番組で、歌うシーンそっちのけで、それこそ毛穴や化粧の塗りムラまで見えるかと思われのようなクローズ・アップによる絵を撮りまくり、局の上層部や「美空ひばり」ファンの怒りを買って、演出部からほされたという伝説がある程で(氏によると、自分独自の美空ひばりへの愛情を表現したものであったそうですが、それが世に受け入れられなかったとの事)、少年時代に「ウルトラ」などで氏の異常な映像の洗礼を受けた我々の中には、私も含め未だにそれが激しいトラウマとなっている人も少なくありません。

こうした映像を作る実相寺氏が監督をしたわけですから「第12話」の場合も、その絵作りによって極端に意味が誇張されたり、観る人に一種の不安を与えるような映像になっていたのなら(私の記憶の中でも「第12話」のシーンの幾つかは、他のエピソードに比べて、子ども心にも極めて異様な感じがした事を覚えています)、もしかしたら(美空ひばりショーの時のように)氏も全く意図しなかったような印象を観客に与えていたかもしれません。そして、この事件以降この作品を観る人々に、テーマが歪められて伝わってしまうかもしれない、との判断が円谷氏によってなされたという事もあり得るかもしれません。特に映像表現というのは(先のキャプション(言葉)付きの写真以上に)いかなる場合でも、最終的には個人(視聴者)の主観に左右される要素が多いので、何の客観性もなく賞賛されたり攻撃されたりという宿命を持った表現ですから尚更です。しかし、そうし

た理由でプロダクションにとって財産ともいうべき映像作品を封印してしまうという事は、個人的にはやはり考えにくいのですが…。しかし、これも判りません。

他に「ヴィジュアル」面で強いて考えられる事があるとすれば、写真の方で問題になったと思われる「ケロイド」状のデザインです。監督の実相寺氏は、このようなデザインは全くイメージしていなかったらしく(毛細血管が透けて見えるようなデザインを注文していたそうですが)、恐らく脚本を読んだイメージから、美術部サイドで独自にデザインした物だと思われます。しかしながらこれにしても、スペル星人の写真が「ひばく星人」というキャプションと一緒に初めて「特殊な」意味を持ったのと同じように、「私はひばく星人である」というような台詞と共に「ケロイド」状の模様を持ったスペル星人が登場するといったようなシーンがあれば別ですが、少なくともシナリオ上では全くありませんから、実際の映像作品ではこのデザインに関しても問題はなかったと思われます。放送時及び再放送時にその手のクレームが一切なかったという事が、それを裏付けていると考えて良いでしょう。しかし今後、被爆者団体の関係者あるいは一般の人でも、仮にこの事件の事を知った上で「第12話」を観た場合、恐らく何らかの先入観なしには観る事が難しくなる可能性があり「やはり被爆者を怪獣扱いしている」とみる人もいられるかもしれません。

● 崩れゆく正義

ではもしも「ヴィジュアル」面の問題もなかったとすると、残るは作品の「テーマ」の問題という事でしょうか？つまり新聞記事でも広島被爆教師の会の会長さんが「作者の原爆への認識が問題だ」と仰っていたように、円谷一氏自身も作者である佐々木守氏の、「原爆に対する認識」を疑ったという事でしょうか？でもそれは最も考えにくい事です。

脚本家の佐々木守氏は「ウルトラマン」「ウルトラセブン」「怪奇大作戦」等で、監督の実相寺昭雄氏との名コンビで数々の傑作を発表してきました。「ウルトラ」の事実上の原作者であり、メイン・ライターでもあった沖縄出身の脚本家・金城哲夫氏が、主にコンビを組んだ監督だった頃の円谷一氏と共に発表した作品群が、本来の「ウルトラ」の骨格である勸善懲悪、正義のヒーロー像を中心に据えたようなオーソドックスな直球的なものが多かった(「ウルトラQ」を除いて)のに比べ、佐々木=実相寺コンビの作品は、怪獣は悪者ではなく、虐げられた者たちであり、ウルトラマンや地球防衛軍の考える「正義」自体が問われるような、社会性の強い変化球的なものが多かったのです。

「ウルトラマン」の一エピソード「故郷は地球」(監督・実相寺昭雄/シナリオ集のタイトルにもなった程、作者のお気に入り)のタイトルもそうした作品の一つです。米ソの宇宙開発が進む時代、アメリカを思わせる某超大国の宇宙ロケットが突如消息を絶った。その某国は国家の威信が失墜するのを恐れ、その事実を隠蔽したのだが、ロケットのパイロット・ジャミラ(ちなみにジャミラというネーミングは、アルジェリア独立戦争で死んだ少女・ジャミラからとられています)は、自分を見捨てた地球へ怪獣となって帰還。復讐の鬼となって暴れまわるジャミラを、無残にもウルトラマンは倒してしまう…。勸善懲悪のウルトラマンや科学特捜隊の“正義”に初めて疑問を投げかけたという意味で私たちの心が強く掴まれるような作品でした。

そして「ウルトラセブン」を経て、「怪奇大作戦」へと続きます。

● 「怪奇大作戦」参上！

ここで簡単に「怪奇大作戦」成立についての話をする必要があると思うのですが、「マン」や「セブン」の前半の頃までは、“ウルトラの正義”に疑問を投げかけていたのは佐々木=実相寺コンビだけでしたが、TBSの反骨プロデューサー・橋本洋二氏が「セブン」の後半から参加したあたりから、やはり沖縄出身で金城氏の盟友であった上原正三氏、若き日の市川森一氏などといった他のライター達も“ウルトラの正義”に疑問を持ち始めていました。1968年当時、時代はベトナム戦争真っ盛りの頃。心あるライター達の中に「いつまでも勸善懲悪のドラマなんかやっついていいのか？」といった思いが湧き上がっても不思議はありません。「セブン」の後半の頃は「ウルトラ警備隊は自衛隊で、ウルトラセブンは日本を守るアメリカ軍、怪獣や宇宙人はどこかの仮想敵国(ベトナムのような国)や罪のない民衆」といった気分が円谷プロの中にすっかり蔓延して、視聴率も落ちていき「セブン」の4クール目あたりは、かなり重々しく暗い雰囲気の商品が多くなってしまったのです(このあたりの事情は1993年にNHKで放送された「私が愛したウルトラセブン」(作・市川森一)というドラマで、フィクションを交えながら寓話的に描かれています。ビデオでも観られるので、興味のある方は是非)。そういう状態の中で終了した「セブン」の後番組として放送された「怪奇大作戦」は、橋本洋二プロデューサーの指揮の元、従来のウルトラシリーズのメイン・ライターだった金城氏に代わり、上原正三氏、佐々木守氏等が中心となって進められました。この作品は彼らが描いてきた、虐げられ抑圧されてきた怪獣の姿は、実は我々人間の姿だったんだという事を吐露してしまった

シリーズだったのです。

そんな「怪奇」の中の一エピソード「死神の子守唄」(監督・実相寺昭雄)は、佐々木守氏が「セブン・第12話」に続き、再び「核」というテーマに取り組みました。体内被爆で白血病となり余命いくばくも無い妹の命を救いたい一心で、天才科学者・吉野は破壊された血液を再生させる「スペクトルG線」完成のため、若い女性に次々と人体実験していく。実験をやめさせようと同じ科学者の立場で説得を試みるSRI。「科学者が何をした。原爆や水爆を作っただけじゃないか。誰だ！誰が妹をこんな目にあわせた！答えられるか君に…。」吉野の叫びに沈黙するしかないSRIを尻目に、非情な警官隊は吉野に襲いかかり、袋叩きにしたあげく手錠をかける。法を犯した唯の犯罪者として…。恐らく「セブン・第12話」よりもっとハードに、もっと露骨に、単なる「核」問題を扱ったドラマを越えて「科学の犯罪」というテーマにまで鋭く切り込んでいたのです。

●佐々木守の目

この他にも佐々木氏は、父の発明した光子ロケットの秘密を体に隠された春日五兄弟が、その完成を阻止しようとする宇宙人達に狙われ(宇宙人は、地球人が光子ロケットを使って宇宙を侵略しようとしていると考えている)、秘密を解くために協力を仰いだ科学者とその家族にも危険が及び、逆に行く先々で阻害されるという、主人公が人間社会から追われるというアンチ・ヒーローを描いた「シルバー仮面」(1971.11～1972.5放映/監督・実相寺昭雄/ちなみにこの作品の主題歌名、第一話のサブ・タイトルはいずれも「故郷は地球」)。ロボットを使って国土の奪還と大和民族への復讐をもくろむ日本の先住民族の末裔・不知火一族と、日本国家警察機構の密使・静弦太郎及び彼を助ける霧島五郎との戦いを描いた「アイアンキング」(1972.10～1973.4放映)、などといった異色特撮ドラマを再びタケダ・アワーから送り出し、又、ATGで大島渚監督の一連の社会派映画の脚本を担当するなど、数々の力作・問題作を発表しています(現在は「知ってるつもり」全シリーズの総監修を担当)。

こうした佐々木氏の視点が、一貫して被抑圧者の視点に立っていた事はこれらの作品をみても明らかな事であって、改めて言いますが同時期に金城哲夫氏と共に、初期のウルトラ作品の総監修・監督を務め、佐々木氏の仕事を知り尽くしている円谷一氏が、氏の「原爆への認識」を疑ったという事とは考えにくいという事です。

しかし、仮にもし「遊星より愛をこめて」という作品が、内容も

しくはテーマの描き方において何かしら視聴者からクレームがつけられるとすれば、一つだけ考えられなくもない事があります。それはこの「第12話」事件についてほとんど沈黙している佐々木氏が残した、後に紹介する数少ない発言からも読み取れるのですが、この作品において、氏が最も描きたかった事にかかわる事だと考えられるのです。

●「平和な国」の住人

「第12話」が放送された1967年は、太平洋戦争の終結、そして「史上最大の殺戮」である広島・長崎への原爆投下から22年目の年で、もはや「戦後ではない」と言われ、所得倍増、高度経済成長真っ只中。地方から多くの人が都会に出て、我も我もと現代の3C(カラー・テレビ、カー(車)、クーラー)を買い求めるようなイケイケの時代でした。あの忌まわしい戦争の事など一刻も早く忘れてしまいたい、過去を振り返らず前だけを見て生きてきた多くの戦後日本人のその姿勢や思いが、世界中が驚くような速さで国を復興させ、このような繁栄をもたらしたのだとも言えます。そんな時代、当事者以外は、恐らく日本人の多くが自分の国に原爆が落とされたという事実など、遠い昔の話であるかの如く振る舞っていたと思われるこの時代に「遊星より愛をこめて」は放送されました。

人間の英智により(?)核兵器全廃を成し遂げたとされる1980年代の世界を舞台にした「セブン」の時代は、まさに多くの人が核戦争などどこ吹く風という気分であつたであろう、平和な(?)1967年当時の日本と重なります。そんな天下泰平の時代に、突然他の国(星)から核実験によって被爆した人(宇宙人)が現れ、しかも日本人の血があれば彼らは生きられるため、その血を盗みに来たとしたら…。日本はパニックに陥るでしょうが、それでも尚多くの日本人は、よその星の核戦争、被爆者の事など、被爆国であるにもかかわらず、自分や自分の国とは全く「無関係」な(無関心な)事としかどらえられないかもしれません。佐々木氏は、スペル星人という架空の被爆者(あえてこう呼びます)を、ブラウン管を通じて我々の目の前に登場させる事で、そうした「平和ぼけ」した「無関心」な我々を痛烈に批判し、敢えて「寝た子を起こす」ような行為をしてみせようとしたのだと思います。

●“差別”の条件

この「セブン・第12話」を本放送でみた頃、私はまだ4歳の子どもでしたから、勿論作者のこのような思いなど判らう筈があ

りません。でもこの日本人の持つ、自分達の身近な問題への「無関心」というのは、思い起こせばあったのだと思います。「広島被爆教師の会」の会長さんが記事の中で仰っていた言葉をもう一度思い返してみましよう。「教育雑誌がなぜこんな興味本位のまんがをのせたのか。編集者、作者の原爆についての認識が問題だ。へたをすると、小さな子どもたちに被爆者に特殊な遺伝があるように想定させ、被爆者への差別感情をつくるなど教育上の危険がある」との発言。この方は勿論教師の方ですから、「教育雑誌」にまんが(写真)をのせた事、「教育上」の問題がある、という事を最も留意されていますので、この段階で作品自体の問題点も指摘していたかどうか定かではありませんが、とにかくこの「まんが」によって、被爆者に対する「無理解」からくる差別意識が、子どもたちの中に生まれる事を最も強く懸念されています(でも、この「無関心・無理解」に対する懸念は、佐々木氏が「第12話」で描きたかった事とある意味で繋がるのですが…)。

しかしながら私個人の少年時代で言うと、それは杞憂であるといわざるをえない状態でした。なぜなら、私は当時「ひろしま」や「核兵器」の事、そして「被爆者」の事など全く知らなかったし、「ゴジラ」をTVで観るあたりまでは情報としてもゼロでした。だから、仮に劇中で「私は被爆宇宙人スペル星人である」と言われたとしても、この場合「被爆」という言葉の正確な情報は勿論、最低限の情報(差別する側が当然持っていなければならぬ知識)つまり「被爆者」という言葉の「一面的」で「歪曲」された情報(例えば、被爆者に触るとガンになる、ケロイドが移るなどといった事等)を持っていなかったわけですから、仮に身近に「被爆者」の方がいたとしても差別のしようがなかったと思います。

そして、そういった「ある種の“情報”による差別」とは別に、「見た目による差別」というものもあります。これは最も簡単で典型的な「差別」の在り方として今も昔も行われています(体型が太っているとか、容姿に問題があるとか等)、例えばもし、当時の私の身近に「ケロイド」を持つ人がいたとしても、「ケロイド」についての情報が全くなければ、唯の「火傷のひどいもの」と思ったでしょう。それ程「無知」だったのです。その事で「いじめ」をしたかどうか判りませんが(勿論私は“差別”や“いじめ”は肯定しませんが)、私個人の少年時代は人並み外れて「無知」「無関心」の典型のような子どもでしたので、「差別」もしなかった代わりに、「思いやり」も持っていなかったと思います。考えてみれば、学校の先生もましてや両親も、皆戦前もしくは戦中派の世代で、ほぼ全員が戦争体験者だった筈ですが、「被爆者」の話は勿論、ある年齢までは戦争の事さえ全く教えてくれ

ませんでしたから、当然といえば当然だったかもしれませんが(自分の無知を親や教師のせいにしても仕方がないのですが)。

●ドント・ルック・バック

そして、それは意外に多くの同世代の友人がそうだったように思います。学年が上になり進学していく度に、「ゴジラ」や「スペル星人」の話はかなりの人としましたが、「被爆者」についての認識や情報は言うまでもなく、「スペル星人」の事を知っている人は大学に上がるまで一人も会った事がなかったのです。仮にそれを、かろうじて知っている人でも「ひばく星人」のキャプションの事を知っている人は、所謂おたく仲間ができるまでは皆無でした。私自身が社会的な問題とは縁遠い人生を送って来たため、「類は友を呼ぶ」で極端にそういう「問題意識の低い人」としかめぐり合わなかったのかもしれませんが、とにかく自分も含め私の周りは、常に自分に興味のある事以外は「無関心」という人の溜まり場だったのです。先の先生の場合は、広島先生ですから、生徒も含めて当然そうした意識は高いわけで、「被爆者」の問題など知り尽くしているであろう子どもにとっては、「ひばく星人」の問題は「無関心」などではいられない筈です。先生が憤ったのも当然であると思います。

しかしながら、大学時代にこんな事がありました。当時、何故か広島出身の友人が何人かいたのですが、ある時「スペル星人」の話をした事がありました。彼らはそろって「ウルトラ」のファンだったのですが、「ひばく星人」の事件を知っていたのは5人中1人でした。そして「核兵器」や「被爆者」についても、それほど問題意識があるわけではなかったようです。その中の一人がこんな事を話していました。彼によると「自分たちの親は疎開していたので、被爆しなかった。だから被爆しなかった事を感謝して、“過去を振り帰らず”とにかく前だけを見て働いてきた。おかげで、今の豊かな生活がある。親には感謝している。反核運動をやっている人も知っているけど、被爆者の人が多いと思う。彼らには気の毒だけど、親がもし反核とかやっていたら今のような生活はできなかったと思う。戦争や原爆の話は親からほとんど聞いた事がない。親も早く忘れたいと思っているみたい…」というような内容だったと思います。彼の名前も良く覚えていないのですが、彼は更に「こういう家庭は、広島でも少なくないのではないか」と言っていました。“広島にも色々な考えの人が入るんだ”と思わされるような話でした。

彼や彼の家族を「無関心」と言えるかどうかは判りませんが、しかしながら彼の言葉は、広島だけに限った事ではないので

はないかと思います。私の親も九州で戦争末期に何度も空襲に見舞われていますので「あの頃の事は思い出したくない」ようですし、友人の親も含め、何らかのトラウマを抱えながら「あの戦争を早く忘れたい」と思っている戦前戦中派の人に何人もあった事があります。だから余程戦争でひどい目に逢い、ある種の怨念を抱えている人が、価値観のレベルで本当に「核」や「戦争」に対する問題意識の高い大人でなければ、子どもにそういう事を教える事はできないのではないかとさえ思っています。恐らく自分の親も含め、「無関心」と言われようと何だろうと、多くの戦争体験者は“過去を振り返らず”走り続ける以外、この厳しい戦後を生き抜く術がなかったのではないのでしょうか？

●日本人の一番みたくないもの

とにかく、理由はともあれ佐々木氏が批判しようとしているそういう事に「無関心」な人々は、恐らく日本に大勢存在すると思われまふ(私自身は勿論、戦争を知らないし佐々木氏程強くないので、自分を棚に上げてこうした人々を批判するなどという事もできよう筈がありません)。それ故、そういう「寝た子を起こす」的な「臭い物のふたを取る」ような内容の作品は、当然支持され難いでしょうし、あるいはそれだけで攻撃の対象になるかもしれません。

我々日本人にとって一番観たくないものは、自分(日本人)の身近な一今尚解決できない一問題(姿)、つまり「日本人そのものの姿」という事が言えるからです。その好例が、「火垂るの墓」(1988年公開/監督・高畑勲/スタジオ・ジブリ制作)です。終戦直後の関西を舞台にした野坂昭如氏の自伝的小説のアニメ化ですが、絶対に忘れてはならない戦争、その極限下の日本人の姿を、もうこれ以上はないという位の悲惨な描写で描ききっており、「もう二度と観たくない」というような光景をわざわざ見せる高畑氏の凄さに圧倒されます。そして「火垂る」と共に同時公開された、この作品の対極にあるファンタジーの傑作「となりのトトロ」(監督・宮崎駿)が、宮崎氏の懸念をよそに、一年に100回以上もビデオで子どもに観せている親がザラにいるのに対し、「最も観たくない日本人の姿」を描いた「火垂る」が恐らく5年あるいは10年(あるいは一生かもしれない)に一度子ども見せる親がいればいい方という、この現実がその事を如実に物語っているとと言えます(近年、テーマ的に既に破綻している筈の「もののけ姫」が、日本映画興行記録を塗りかえる程のヒットになり、究極のファンタジーを指向している宮崎氏の作品の世間での認知度は不動のものとなりました。それらのヒットを支えた“子どもを怒れない”数多くの親たちが「この映画を観せて、

子どもに我々の代わりに宮崎さんに怒ってもらいたいんです」と、異口同音に語っていましたが、これも子どもに「無関心」な親たちの、映画によって“免罪されたい”という事の表れかもしれません)。

●「ひばく星人」の真相？

そして佐々木氏は、自分の狙いをより強く表現しようと、毎度の事ながら鋭い変化球を投げています。先に氏の批判は、平和なこの日本人(地球人)が、自分たちの過去の過ちと、宇宙人が自らの過ちによって起こしてしまった現在の悲劇(核実験)とを、全く無関係のものとしかたらえられない「無関心」さに向けられていると述べましたが、この「第12話」ではそれだけ氏は強い主張を持っていながら、主人公のモロボシ・ダンがそういう地球人の無関心さを批判するとか、あるいは他の隊員もしくは登場人物が、自らの無関心さに気づいて悩むとかいった、氏の主張を直截的に描いているシーンがひとつも出てきません。つまり作者の気持ちを代弁したり、視聴者が感情移入できるようなキャラクターが全く存在しないという事なのです。その事についてあるインタビュアーが氏に質問した処、氏は「そういう場合にね、安易に感情移入できるキャラクターというのは出すべきではないと思うんですよ。そうすると、そのキャラクターが苦しむことによって、視聴者は免罪されたような気になって、それっきりで忘れてしまうこともあるんじゃないですか？」と語っています。

確かにちょっとテーマ性の強い反核映画や反戦映画といったものは、主人公もしくは登場人物が、声高に主張(テーマ)を叫んだり号泣したりと、観客が感情移入し易い作りのものが多く、そしてその余韻はあるものの、映画が終わると全てを忘れ、又何事も無かったように日常に戻る、というパターンがほとんどです。何故なら、そうでない、起承転結やテーマがはっきりしないようなものは、ある種「映像」という倒錯した世界でカタルシスを昇華させたいと思っている、大多数のお客さんは観たくもないし観てくれないからです(映像というのは良くも悪くも「現実逃避」に最も最適な手段と言える代物ですから)。

だから氏のこのような視点で作られた「第12話」は、並の想像力の人が観たら感情移入もできず、テーマもはっきりしない、全くわけの判らない作品とみなされたでしょう。また各被爆者団体の方が、もし事件直後に予定されていた再放送を観ていたとしても、やはり正確には氏の意図は伝わらず、結果は同じだったかもしれません。仮に視聴者がその意図を理解できたとしても、氏の狙い通り心に深く「核」の問題が刻まれるようなインパクト

トを受けたとしても、そうした問題を自分の問題として「受け入れる」覚悟がなければ、ある種の(免罪されない)気まずさを感じつつ、完全に無視するか、あるいは攻撃するかといった事になってしまうでしょう。つまり自分を守るにはそうする事しかないのだと思います。“過去を振り返らない”で進んできた我々の親達のように。

こうしてある種の崖っぷちに立たされていた当時の円谷氏が、こうした佐々木氏の独特の視点や意図、表現スタイルによって生まれた「第12話」をもう一度自ら検証し、この事件以降の再放送による予測できない影響を危惧し、やむをえず封印という事を考えたのかもしれませんが。仮にそれが理由の一つだったとすれば、それだけ佐々木氏の仕掛けた爆弾は、被爆者のみならず普通の人達の逃げ道を塞ぎ、否応なく現実に向かわせるといふ、強烈な破壊力を持っていたのだと言えます。でも氏は、抗議された被爆者団体の方々について「この問題に関しては、抗弁する気はありません。虐待された人々がとる抗議行動は、たとえそれがどんなものであれ、すべて正当だと思います。

なぜなら差別された人の気持ちは、そうでない人には絶対にわからないですから」と言っており、今後もこの事件についての真相、自分自身の思いについては、氏の口から語られる事はないでしょう。

●さらばウルトラマン

これまで「言葉」「ヴィジュアル」「テーマ」といった面から、“何故「第12話」が封印されたか”という理由について考えられる限りの想像、仮説に基づく検証を行ってきましたが、最後に最も現実的な面からみた検証を試みたいと思います。

それは「ウルトラマン」を復活させるという理由から、という事です。これはどういう事かを説明する前に、この頃の円谷プロの状況について、少々ご説明しましょう。

実は、この「第12話」の事件が持ち上がった前後の1969年～1970年頃の円谷プロは深刻な経営難に直面していたのです。無数のキャラクターを保有し、何百本というウルトラ作品を制作し、グッズ、ビデオ、LD、DVD等の売上などで年商何十億(何百億かも?)を誇る現在の状況からは考えられない事ですが、当時は壁がありました。

「時代」という壁です。

1967年10月に「ウルトラセブン」がTBSのタケダ・アワーからスタートしましたが、それに対抗して今度はフジテレビが、我が局にも「円谷特撮」と子どもだけでなく大人も楽しめるような一時間物の特撮ドラマを、円谷プロに発注しました。当時のお

金で一本につき一千万円の予算を組んだ「マイティジャック」がそれで、鳴り物入りで1968年4月より午後八時から放送がスタートしたのです。しかし、視聴率は関係者の期待を大きく下回り、毎回10%前後という円谷プロとしては極めて不名誉な成績のまま、1クールで終了。その後路線変更し、従来の円谷テイストに近い子ども向けの30分番組「戦え！マイティジャック」としてリニューアルされ、時間帯も午後七時からの放送に切り替わりましたが、これでも人気は上がらずこれも2クールで終了してしまいました。更にこの「時代」。ベトナム戦争の影響で厭世的なムードが蔓延していたこの「時代」。先述のように、円谷プロの看板番組「セブン」も4クール目の暗く重たい作品群の影響で視聴率も下がっていき、歯止めがかからないまま1968年9月に終了しました。以後3年余「ウルトラ」は我々の前から姿を消してしまっただけです。「ウルトラ」の産みの親で、これらのメインライターだった金城哲夫氏も、責任を感じて円谷プロを辞め(これだけが理由ではありませんでしたが)、ウルトラマンのように身も心も傷つき、沖縄に帰って行ってしまいました。

「帰ってきたウルトラマン」より ラインの二重線に注目

●スポ根時代到来！

やがて「セブン」の後オンエアされた「怪奇大作戦」が、1969年3月で終了すると、各TV局からの同プロへの番組の発注がなくなってしまったのです。「時代」はモーレツ時代。「巨人の星」「あしたのジョー」といった、梶原一騎(高森朝雄)原作による熱血スポ根漫画全盛の時代に入っていたからです。TVのアニメも「巨人の星」(1968.3～1971.9放映)「タイガーマスク」(1969.10～1971.9放映)「アタック・1」(1969.12～1971.11 放映)「あしたのジョー」(1970.4～1971.9放映)「赤き血のイレブン」(1970.4～1971.4放映)「キックの鬼」(1970.10～1971.3放映)、実写では「怪奇」終了後のタケダ・アワーから「柔道一直線」

(1969.6～1971.4放映／後の「仮面ライダー」で数多く見られるアクション中心の特撮技術が駆使された)「サインはV」(1969.10～1970.9放映) などといった、毎週日替わりで違ったスポ根ものが放送されているといった時期でした。怪獣の人気は過去のものとなり、金のかかる特撮は敬遠され、TV局の間で「円谷プロの作品は、金をかけてももう受けない」というジンクスができてしまった時代だったのです。

●日本の伝統芸能「特撮」

言うまでもなく「怪獣」の登場する日本の特撮は、「ゴジラ」の時代から今も昔も余り変わらない、着ぐるみ(の中に人が入り)とミニチュア(模型)ワークを駆使し、それに合成技術を加味するという日本独特の「伝統芸能」です。能役者が「お面」を被って舞を舞う事と役者がウルトラマンや怪獣の「着ぐるみ」の中に入って暴れまわる事は、「被りもの」を手先の器用な日本人の職人芸で作られ、それを使って役者が芸を披露するという点では同じと言えます(アメリカあたりの特撮「SFX」では、超リアルなCGによるミニチュアと実写の緻密なる合成技術が中心で、着ぐるみに人が入るとい事はほとんどありません)。そして他国では見られない日本独自の文化を日本の特撮は切り開いたのです(1985年に、映画ーハリウッド映画や、特に日本の特撮映画ーの熱狂的な「おたく」である金正日氏が、自ら制作総指揮(エグゼクティブ・プロデューサー)を行い、日本からゴジラ俳優とそのスタッフを招き、莫大な資金と人を投入して北朝鮮初の怪獣特撮映画「伝説の大怪獣・プルガサリ」という映画を制作。当時、日本で特撮映画が撮れないでいたスタッフ達の優れた職人技が、かつての「ゴジラ」時代の迫力を北朝鮮で復活させていたというのも奇妙な話ですが、この作品は金氏の円谷英二に対するオマージュが随所に込められ、数年前日本でも公開され大ヒットを記録しました)。

●大恐慌・円谷プロ

この様な世界に誇る日本の特撮映画(J・ルーカスやS・スピルバーグも、円谷英二氏を“神様”のように尊敬している)も、そうした手作業中心の特性から普通のTV番組以上に、当然の事ながら人手とお金を喰う事になります。他番組もそうですが、一般的にプロダクションで実際にかかった制作費よりもTV局の買い取り価格の方が安く、特に予算を喰うアニメや特撮といった番組は一本作るごとに確実に赤字が増えていくという事になるわけです。だから最近ではビデオの販売収入でようやく赤字

が埋まるかどうか(勿論人気があれば売れますが)、視聴率が良くてその他のグッズやおもちゃ、関連商品がうんと売れば赤字が見込めるという、これら副次収入をあてにせざるをえない状況で、各プロダクションは番組を作っていかなければならないというのが現状なのです。

まして、当時は余り「二次収入」という感覚のない時代でしたから(勿論、作品制作のみできちんと収入が得られるというのが、本来のまっとうな映像制作のあり方ではありますが)尚更大変でしたが、それにしても、特に「ウルトラ」の場合は30分物一本につき直接制作費が平均750万円、ひどい時で1000万円かかっていたようで、それに対してTV局の買い取り価格は約550万円位ですから、一本につき約200万円、一年間(約50本)続けたら約一億円の赤字が出るという状態でした。

●天然色映画防衛指令

それとこれも丁度「時代」の表れですが、当時の円谷作品の全てが「カラー作品」であった事も、家計を圧迫する一つの大きな原因でした。今ではドラマやバラティ番組の再現シーン等を除けば、TV番組は全て「カラー」が当たり前で、映画にしても白黒フィルムを使用して制作する方が高くつくという時代ですが、私と同世代かそれより上の方は良くご存じの通り、当時のTV番組は大半が白黒作品及び白黒放送で、TVも白黒TVが普通、カラーTVのある家庭はお金持ち、という感じでした(先述した“現代の3C”の一つがカラーTVだったというのは、まさに時代です)。

ただしアニメや特撮作品は、カラーTVを各家庭に普及させようとする家電メーカーの要請で(「ジャングル大帝」(1965.10～1966.9放映/手塚治虫・原作)を日本初のカラーによるTVアニメとして虫プロに作らせた三洋電気がその先駆け)、割と早い時期にカラー化が進められ、1966年頃には全てのTVのアニメ・特撮作品全17本中、カラー作品は「ウルトラマン」など5本程度だったのが、翌1967年にはカラー作品は「ウルトラセブン」を含め、全22本中なんと13本にまで膨れ上がっているのです。

しかし、先程も申し上げたように、アニメや特撮というのは恐ろしく人と金を喰う代物で、しかもカラーにすると、当時は白黒作品の倍の予算が必要という事になり、各プロダクションの経営を圧迫していきました。必然的に翌年1968年には各プロがカラーから撤退していき、カラー作品は全19本中7本にまで激減していったのです(翌1969年からは又カラーが増えてきました)。そんな中、日本初のカラーによるTV特撮作品「ウルトラマン」を送りだした円谷プロだけは一放送は「マグマ大使」(手塚

治虫・原作／カラー作品)の方が先でしたが、業界の期待もあってカラーで特撮物を作り続けなければなりません。そういう状態でしたから作品発注の止まった円谷プロにとっては、まさに台所は火の車だったわけです。

●帰ってくるか!?ウルトラマン

その後円谷プロは、借金返済と経営維持の為に積極的にマーチャンを展開し始めました。©をつけた怪獣のおもちゃやグッズ、後に問題化する雑誌媒体への積極的な怪獣キャラクターの売り込み等は、この頃から本格的に始まったのです。また「ウルトラQ」や「ウルトラマン」などの旧作を、TBS以外の局(日本テレビ、フジテレビ)にも(放送権を)売りに出し、いずれも午後六時台の再放送としてはかなり高い20%前後の視聴率を稼ぎ出し、さらに本家TBSでは、再放送等で復活してきた怪獣人気を睨み、1970年頃位からTBSプロデューサー・橋本洋二氏と円谷一氏との間で、いよいよ新しい「ウルトラマン」の企画の検討が始まっていました。

そして、ようやく来年春(1971年4月)から「帰ってきたウルトラマン」として新作を放送する(スポ根アニメ「キックの鬼」の後番組として)めどがついた頃(1970年10月)、この「スペル星人」の事件が持ち上がってしまったのです。新作を取るか旧作を取るか、クリエイターの意地を取るか、社長として新たなウルトラマンの復活にかけるか。円谷氏はきわめて辛い選択を迫られていました。

●円谷一の決断

ちょっと判断を誤ったら企画が無くなってしまうかもしれません。TBSの方だってそんな面倒に巻き込まれたくはないでしょうし、それにこの当時は特に、右から左から様々な(圧力)団体がスキを見てはTV局に難癖をつけて、恐喝まがいの事を随分やっていたような時代でした(この時の「第12話」の再放送だって、むしろTV局の方が、そうした圧力を恐れて、自ら自粛してしまった可能性だってあります)。つまり、僅かなボタンの掛け違いで、新しいウルトラマンはおろか、もしかしたら円谷プロ自体だって存続が危くなるかもしれない状況だったわけです。

円谷氏は考え抜いた末、苦渋の決断により「スペル星人」を犠牲にして、新しいウルトラマンを選択しました。しかしそのおかげ(と言っていいかどうか分かりませんが)で傑作「帰ってきたウルトラマン」が生まれた事を考えると、この決断はベストとは言えないまでも、この時点で考えられる最良の方法だったと言う

事はできるでしょう。

しかしながらその後のウルトラ・シリーズ、今日のキャラクターグッズ中心の、「ウルトラ帝国」の繁栄があるという事を考えると、その事が良かったのか悪かったのか判りません。こんな事で葛藤しているのは私だけかもしれませんが、でもそれは、円谷プロにとっては間違いなく、「尊い犠牲」であった事は確かなのです。

●拝啓・スペル星人様

以上、私個人の全くの想像、独断と偏見によって、封印された「ウルトラセブン・第12話」の真相に迫ろうと試みましたが、やはり決め手に欠けた状態のまま、この拙文に幕を降ろす事となりました。私の力不足で読者の方々も、色々と釈然としない思い、多数の疑問を持たれた事と思います。しかしながら、最初にこの事を問題にしたYさんや欠番にされた円谷一氏の心の内、監督の実相寺昭雄氏、そして作者の佐々木守氏のこの作品に込めた想いなどを、写真や活字、言葉、ビジュアル、円谷プロの歴史等の裏にあるものを探りながら、自分なりにできるだけ理解し、それを皆様にお伝えしようと努めたつもりです。

唯私個人としては、殊更この事件の是非を問うたり、何らかの問題提起をするつもりはさらさらありません。私の願いは唯一つ、“「第12話」をもう一度観たい”という事、それだけです。

事件から30年。直接の当事者であった円谷一氏は、この事件から3年後の1973年に亡くなり、一氏の実弟であり、円谷プロのマーチャンの基礎を作り経営を建て直した三代目社長の円谷皐氏も1995年に他界。関係者の方達の多くは鬼籍に入られ、歴史の彼方に「セブン・第12話」が消えようとしている(既に消えている)現在でも、まだ封印が解かれる気配がありません。今年3月、東京・品川のアートスフィアという劇場で、実相寺昭雄氏の監督作品や氏の所属事務所・コダイの関連作品、氏構成・演出によるクラシック・コンサートなどを交えた催し「ファンタスマ」が行われました。ウルトラ作品は勿論、ATG映画や滅多に観られない氏のTVドラマやCM作品の上映など、ファンには生唾ものの企画でしたが、ここでも「第12話」は上映されませんでした。“やはり外に出すのは問題がある”との事で、この封印はほとんど理由の有無を問わず習慣化しているとさえ思えます。

そうなると、正規ルートが駄目なら裏ルート(?)で観る方法が無くもありません。入手経路は不明ですが、実は「第12話」の裏ビデオが存在し、マニアの間でもある時期出回っていたのです(私はまだ見た事はありません)。とにかく、これを探すという

手があります。でも最も所在がハッキリしているものは警視庁。ここに一本保管されています。実はこれは、10年前の「幼女連続バラバラ事件」の犯人・宮崎勤氏が所有していたものを証拠品として押収したものだ。「おたくは怖い」と、殊更に我々“おたく”に対する恐怖心を煽りまくったマスコミの過剰報道と共に、彼の自室に所狭しと積み上げられていた、6000本とも言われるビデオの山の映像を記憶されている方もいらっしゃるでしょう。あの山の中にあったわけです。警視庁の知り合いをつくってこっそりダビングしてもらうという手もあります。それもダメなら、最後の手段は、ファンを装って円谷プロへ侵入し、フィルムを持ち出してしまおうという事くらいしか手がないかもしれませんね。

でもやっぱりこの「第12話」は、観るなら陽の当たる場所で、正式に封印が解かれた上で堂々と観たいと思います。佐々木守氏に先述のような意図があったのなら、尚更の事。今一度、日本の皆が観るべき作品ではないかと思えます。「スペル星人」は、氏が一貫して描いてきた他の怪獣・宇宙人と同じように、最後の最後まで人間の手により抑圧・差別されて封印されてしまいましたが、いつの日にか「名誉回復」できる日が来るかもしれません。21世紀はそんな世紀であって欲しいと思えます。

最後に、このような拙い文章に最後まで付き合っただ下さった皆様に心からお礼申し上げます。「第12話」や事件に関する情報、(裏)ビデオの所在、又、御意見、御感想などありましたらどしどしお寄せ下さい(土曜講座まで)。どうも有り難うございました。■

★参考文献★

- ・怪獣使いと少年(切通理作・著／宝島社)
- ・テレビヒーローの創造(樋口尚文・著／筑摩書房)
- ・星の林に月の船(実相寺昭雄・著／大和書房)
- ・夜ごとの円盤(実相寺昭雄・著／大和書房・絶版)
- ・ウルトラマンのできるまで(実相寺昭雄・著／筑摩書房)
- ・ウルトラマンに夢見た男たち(実相寺昭雄・著／筑摩書房)
- ・ウルトラマンの東京(実相寺昭雄・著／筑摩書房)
- ・ウルトラマン昇天(山田輝子・著／朝日新聞社)
- ・イカす！おたく天国(宅八郎・著／太田出版)
- ・円谷皐 ウルトラマンを語る(円谷皐・著／中経出版)
- ・バルタンの星のもとに(飯島敏宏・著／風塵社)
- ・宇宙からの贈り物(金城哲夫・著／朝日ソノラマ・絶版)
- ・ノンマルトの使者(金城哲夫・著／朝日ソノラマ・絶版)
- ・24年目の復讐(上原正三・著／朝日ソノラマ・絶版)
- ・ウルトラマン怪獣墓場(佐々木守・著／大和書房・絶版)

- ・故郷は地球(佐々木守・著／三一書房・絶版)
- ・夢回路(市川森一・著／柿の葉会・絶版)
- ・映画宝島「異人たちのハリウッド」(JICC出版局)
- ・映画宝島「怪獣学・入門！」(JICC出版局)
- ・メーカー・オブ・円谷ヒーロー(講談社・絶版)
- ・ウルトラマン大全集(講談社)
- ・ウルトラマン99の謎(青柳宇井郎、赤星政尚／二見書房)
- ・ウルトラマン特撮99の謎(青柳宇井郎、赤星政尚／二見書房)
- ・ウルトラ怪獣99の謎(青柳宇井郎、赤星政尚／二見書房)
- ・大怪獣ゴジラ99の謎(青柳宇井郎、赤星政尚／二見書房)
- ・帰ってきた帰ってきたウルトラマン(辰巳出版)
- ・円谷英二の映像世界(実業之日本社) ■

★参考作品★ (ビデオレンタル可能なもの)

- ・ウルトラQ(全巻)
- ・ウルトラマン(全巻)
- ・ウルトラセブン(第12話を除く全巻)
- ・マイティジャック(全巻・希少／LD全巻)
- ・戦え！マイティジャック(全巻／希少／LD全巻)
- ・怪奇大作戦(第24話を除く全巻・希少)
- ・帰ってきたウルトラマン(全巻)
- ・シルバー仮面(全巻・希少)
- ・ウルトラマンA(全巻)
- ・超人バロム1(セレクト版・希少／LD全巻)
- ・アイアンキング(全巻・希少)
- ・ウルトラマンタロウ(全巻)
- ・ウルトラマンレオ(全巻)
- ・ウルトラマン80(全巻)
- ・ウルトラマンティガ(全巻)
- ・ウルトラマンダイナ(全巻)
- ・ウルトラマンガイア(全巻)
- ・エコエコアザラク(全巻・希少)
- ・佐武と市捕物控(全巻／希少)
- ・どろろ(セレクト版・希少／LD全巻)
- ・タイガーマスク(セレクト版・希少／LD全巻)
- ・超電磁マシーン・ボルテスV(セレクト版・希少／LD全巻) ■

このエッセイに対する皆様のご意見・ご感想を心からお待ちしています。あて先は土曜講座・上田です。どうかよろしく願います。(「どうよう便り」編集部より)